

ドイツにおける難民へのドイツ語学習支援活動

荒木 萌(慶應義塾大学大学院生)

1. はじめに

ドイツは2015年、16年に120万人以上の難民を受け入れ、労働市場への統合を目指して難民政策を進めている¹。特に難民政策の中で中心的な役割を果たしているのは、2005年の新移民法制定とともにはじめられた統合コースである。統合コースは、ドイツ連邦移民難民局(Bundesamt für Migration und Flüchtlinge, 以下BAMF)が主導して移民・難民を対象に行うドイツ語教室であり、難民の場合基本的には認定を受けた後に受講資格を得ることができる。しかし、大量の難民受け入れに伴って統合コース受講希望者が殺到し、一部の庇護申請者には認定前から受講資格を与えるなど、BAMFは統合を速やかに進めるべく制度の改正を行っている²。

統合コースの受講資格は拡大したものの難民の中には統合コースの受講申請から開始まで待たなければならない人、受講資格のない人、個人の事情で受講できない人などがある。そのような中、ボランティアによるドイツ語学習支援活動が行われている。難民の統合コース受講に関する研究は多くみられるが、ボランティアのドイツ語学習活動については管見の限りまだ取り上げられておらず、本研究には新規性がある。

本発表では、ドイツのパッサウ市で統合コースを行う民間のドイツ語学校や難民・移民に対する学習支援団体で行ったインタビュー調査と参与観察をもとに、難民に対するドイツ語学習支援活動の意義とその有効的な方法について考察する。

2. 先行研究

はじめに、難民受け入れ後の統合コースの変容に関する研究について述べる。木戸(2017)は2015年以降の庇護申請件数と統合コース受講希望者数の増大、平高・荒木(2018)はさらに統合コース内のドイツ語教育におけるニーズや制度の変更についてまとめている。それらによると、BAMFは難民受け入れの状況から、参加者の需要に合わせた特別クラスの拡大、認定後の素早い社会統合を目指した統合コース受講資格の変更等を行っている。しかし、庇護申請者の国籍や居住地によって統合コースを開始できる時期が異なり、難民間でも格差が生まれている。2017年以降は難民申請数と統合コースの受講申請数はともに落ち着きを見せているが、難民にはドイツ語学習に時間がかかる人が多いため2018年冬の時点でも統合コース受講者は難民が大半を占めている。

次に、ドイツ語学習支援ボランティアに関する先行研究を概観する。連邦家族・高齢者・女性・青年省(Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend)の委託でドイツの調査機関アレンスバッハ研究所(Institut für Demoskopie Allensbach)が2017年に行った調査によると、国民の55%が何らかの形で難民支援に携わっていた。また支援活動の中では、難民支援に携わったことがある人の約4分の3がドイツ語学習の手伝いを行っており3番目に多い³。

久保山(2009)によると、2005年の統合コース開始前から自治体や福祉団体などの中間組織によってドイツ語能力の向上を目指すプログラムをはじめとする移民・難民向けのさまざまなプロジェクトが行われていたが、ボランティアによる支援については述べられていない。熊谷(2016)は難民に対するドイツ語学習支援ボランティアに関して、レーゲンスブルク市における調査報告を行っている。同市ではドイツ語教員の資格を持たない市民ボランティアによって成人向けの語学コースが行われているという。

3. 調査課題

本調査の目的は2つある。1つ目は、法的地位に関係なく難民が参加できるボランティアのドイツ語教室やドイツ語能力向上と情報交換を目的としたドイツ人との交流の場を提供する交流プロジェクトが、一定の意義を持つ活動であると示すことである。2つ目は、統合コースを行う民間のドイツ語学校とボランティアの連携が難民の言語学習において有効であると明らかにすることである。調査は特に以下の点に焦点を当てて行った。

¹ 公益財団法人日本国際交流センター(2017)による。

² 平高・荒木(2018)参照。

³ 1番多かったのは、ドイツの事情の理解のための手伝い、2番目は余暇を難民と過ごすことであった。

- ① 統合コースとボランティアのドイツ語学習支援の役割と棲み分け
- ② ボランティアのドイツ語教室の課題
- ③ 統合コースを行う民間ドイツ語学校とボランティアの連携
- ④ ドイツ人と難民の交流プロジェクトと地域での社会参画

4. 調査対象・方法

2017年夏と2018年冬にドイツでフィールドワークを行い、それぞれ以下の機関・団体で調査を行った。

- (ア)キリスト教プロテスタント派の学生団体(Die Evangelische Studierendengemeinde Passau, 以下 ESG) : 同団体の学生牧師でドイツ語のプロジェクトの主任者, ドイツ語教室を行う有資格者ではない学習支援者にインタビュー調査と, A1.1 と A2.1 のクラスの参与観察を実施。
- (イ)難民カフェ(Asyl-Café) : 難民カフェと呼ばれる市民の集いの場⁴。難民とパッサウ大学の学生・市民の交流を数度参与観察と学生ボランティアにインタビュー調査を実施。
- (ウ)女性カフェ(FrauenCafé) : Gemeinsam leben & lernen in Europa e.V. というパッサウ市にある社団法人が運営する難民の女性と市民が参加する交流の場。女性と子どもの参加のみ認められている。難民女性とパッサウ市の子育てを終えた年代の女性市民の交流の場の参与観察を実施。
- (エ)パッサウ市の市民大学⁵ : 統合コースを行うドイツ語教員兼外国語としてのドイツ語の主任者にインタビューを実施。

5. ボランティアのドイツ語学習支援活動—パッサウ市の事例から—

5.1 ボランティアのドイツ語教室—パッサウの ESG を例に—

パッサウ市の ESG は週に 5 日間, 夕方 16 時から 18 時の 2 時間, 移民や難民に無料でドイツ語の授業を提供している。ドイツ語教室は 2015 年以降に難民支援としてはじめられたのではなく, 約 30 年前から行われている。以前の参加者は後期帰還者⁶やドイツ人の配偶者, 難民が多かったが, 2015, 16 年以降は難民の参加者が増え, クラスの数や 1 クラスの学習支援者の数を増やして支援を行っている。また一時は識字コースも提供していた。

ドイツ語学習支援者の多くは学生だが退職教師もボランティアとして活動していた。学生の専攻は教育学, 人文学, 法学などさまざまボランティアをしたい人は誰でも参加できる。ボランティア希望者は 2015 年以降大幅に増え, 各学期のはじめにオリエンテーションと称して教授法の共有やボランティア間のネットワークをつくるイベントが行われる。学期中は, オンライン上のプラットフォームでボランティア間の情報や教材の交換, スケジュール管理を行っている。

ESG では, パッサウ市の市民大学で行われている統合コースで使われている教材を使用してドイツ語教室を進めている。しかし, 統合コースで教わるような文法事項の基礎を教えるというよりは, 日常での会話で使える表現を優先して教えているという。またクラスのレベルは A1.1, A1.2, A2.1, A2.2 と分けられ, 1 学期(13 週間)かけてコースを終える。

5.2 ドイツ人学生と難民の交流プロジェクト—パッサウの ESG の “Come together for German” を例に—

ESG はドイツ語教室以外にも, “Come together for German” というタンデムプロジェクトを行っている。このタンデムプロジェクトは, ドイツ語を学んでいて, 話したい人とドイツ語学習者を手伝いたいドイツ人をマッチングするプロジェクトである。年間に 50~100 人がこのプロジェクトに参加していて, 参加者の多くは統合コースなどで B1 の取得のためにドイツ語を学ぶ難民だという。学期中には, 参加するドイツ人のために教授法や異文化理解などさまざまなテーマの研修が用意されていて, タンデムを通して不安なことや困難があった時にも ESG を通して解決を目指す。基本的に ESG はタンデムのペアリング後はそのペアの活動にはあまり関与しない。タンデムは最低週に 1 時間行うように言われているが, その 1 時間はドイツ語学習でも雑談でも料理でも自由である。また, 曜日や時間も決められていないためペアごとにフレキシブルに活動できる。学期の最後にはパーティが行われ, そこに顔を出すペアも多いという。

このタンデムプロジェクトを通して, タンデムのペアがプロジェクト終了後も友人として一緒に活動することも少なくない。ESG では年間で 30~50 組のタンデムを斡旋する。しかし, すべてのタンデムが成功しているわけではない。ESG が慎重に参加者のプロフィールを見ながらペアを作っても, 相性や話が合わずタンデムが続かないペアもいるという。

⁴ 直訳すると「難民カフェ」であるが, 古くからパッサウ市民が自由に会話を楽しむ交流の場であり, 難民のために作られた場所というわけではないという(パッサウ市難民支援コーディネーターの直話による, 2017年8月7日)。

⁵ 市民大学とは, 市が運営する学校で外国語以外にもスポーツやパソコンなどの技術系の講座があるカルチャースクールを指す。

⁶ 後期帰還者(Spätaussiedler)とは, ドイツ民族であることで迫害されて旧ソ連や旧東欧地域に強制移住したが, 1992年12月31日以降に帰還した人々を指す。つまり, ドイツ人だがドイツ語を話すことはできなかったため, 統合コースの受講資格を得た。

5.3 集いの場での交流プロジェクト—パッサウの難民カフェと女性カフェを例に—

2週間に1度行われる難民カフェには、年齢や国籍、来独歴がさまざまな人が訪れる。訪れた人々は、運営側が用意したコーヒーや紅茶、クッキーやフルーツを楽しみながらそれぞれ自由に会話をする。庇護申請中の書類を持ってきた難民は簡単なドイツ語に訳してもらったり、語学学校でドイツ語を学ぶ難民はドイツ人との自由な会話で自分の語学力の向上を目指す。また、交流の場は情報交換の場でもある。ドイツの大学進学を目指す難民は受験方法に関する情報や、また語学学校の空きの情報と交換していた。難民カフェは学生ボランティアによって運営され、交流所の開放や飲み物、食べ物の準備と片付けなどが主な仕事である。学生ボランティアによる運営といっても、準備や片付けには参加したドイツ人や難民からも手伝うため重労働であるという印象は受けなかった。

また、法律を学ぶ学生のボランティアにより結成された庇護申請に関する相談会が、学期中に数回難民カフェを実施している施設内の一室で行われていた。難民カフェで庇護申請に関する情報を交換したいという難民は多い。しかし難民カフェを訪れるドイツ人はドイツ語を理解できても法的な内容まで理解することは困難である。そのため、難民カフェが場所の提供を行い、学生による法律相談会と連携することでより効果的に活動を行っていた。

この難民カフェの難民の参加者は若い男性が圧倒的に多い。その理由として、難民がそもそも若い男性が多いという点と、家庭や宗教的な理由で女性は家で子育てをするべきだという考えがある点や、ほかの男性がいる場所に行くことを認めない文化がある点があげられる。難民女性のドイツ社会参画はBAMFも課題としており、それを危惧してパッサウ市ではじめられたのが女性カフェである。2週間に一度15時から17時に子供を連れた若い難民や中東出身者が集まり、雑談をする。ドイツ語能力はさまざまで、独自に学習をはじめたばかりの人から大学の難民向けのプログラムに申請している女性もいた。ドイツ人の参加者はパッサウ市に長く住む中年女性や子育てを終えた女性が多い。子供たちは運営のドイツ人と一緒に近くの公園や部屋で遊ぶ。その間にドイツでの子育てやドイツ語学習の困難さを話していた。

6. まとめと今後の展望

ここでは、3章で述べた調査課題に沿って分析する。

統合コースは「社会参画とその機会の平等という意味での移民の統合促進」を目的として、一般的には600時間かけてB1のレベルの達成を目指す。つまり統合コースの役割は移民・難民のドイツ語習得とそれによる社会参画の促進である。それに対して、ボランティアのドイツ語教室には4つの役割があると考えられる。1つ目は、統合コースを受講できない人のドイツ語習得と社会参画の促進である。公式にドイツ語を学ぶ機会がなく金銭的に語学学校に通うこともできない難民にとって、ボランティアのドイツ語教室は教科書を使って勉強できる唯一の場所となる。また、交流の場は普段ドイツ人と関わる機会がない難民にとって社会参画の一步として重要である。2つ目は、ドイツ語学習のモチベーションの維持である。統合コースの受講待ちの難民は、ドイツに滞在しているものの統合コースに通うこともできず働くこともできない。その時にボランティアのドイツ語教室に通ったことでドイツ語学習へのモチベーションを保つことができるという。また、ESGのドイツ語教室の最後には出席率が良い参加者に修了書が渡される。この修了書は公的なドイツ語能力の証明書ではないが、「決まった場所に来る」ことの証明であり、修了時に何も無いよりは参加者たちのモチベーションをあげることもできるという。3つ目は、学習速度が遅い学習者にとって学びやすいということである。図表1で分かる通り、統合コースは4週間で100時間の授業を行い、1つのモジュールを終える。それに対してESGのドイツ語教室では13週間かけてゆっくりと130時間の授業を終える。特に識字能力が低い人にとって、統合コースを受ける前に一度ゆっくりと学んでおくことは統合コースでドイツ語を理解するときに役立つという。4つ目は、統合コースに通う時間がない人にとって夕方2時間行われるドイツ語教室は都合が良いということである。既に働きはじめている人や子育てをしていて午前中統合コースに通うことができない人にとって、夕方の短い時間にドイツ語を学べることは便利である。

図表1 統合コースとESGのドイツ語教室の違い

	統合コース	ESGのドイツ語教室
参加者	BAMFから受講を認められた人	だれでも、いつからでも受講可能
教員	BAMFに認定された有資格者	だれでも支援可能
期間	1つのモジュール(A1.1など)を4週間	1つのモジュールを1学期(13週間)
時間数	100時間	約130時間
料金	1回の授業につき1.95€	無料
修了後の資格	統合コース修了とともにB1の資格を得る	出席率のみによる修了書が発行される

ボランティアのドイツ語教室は、統合コースに通えない人にとってドイツ語学習という目的には十分とは言えないものの補完的役割を果たしているが、課題も抱える。例えば、無料で法的地位に関係なくだれでも参加できるので、参加者の動機がさまざまである。あるクラスではドイツ語を学びに来ている人もいるが、友人が行くからという理由で参加する人もいる。それが原因で教室内の秩序が乱れることも少なくないという。また、ボランティアのドイツ語教師は母語話者でもA2以上の教授法には限界があるという。

そこで、ボランティアのドイツ語教室は統合コースを行う市民大学と連携をとり、より良いドイツ語学習支援を目指している。市民大学では統合コースを受講できない難民に、ESGの無料のドイツ語教室を紹介してドイツ語学習をボランティアに任せることもある。また、5.2に記したタンデムプロジェクトも市民大学でドイツ語を話したいという難民の声に応じてESGが立ち上げたプロジェクトである。他にも、パッサウ市内で行われる統合コースで使われているものと同じ教材を使用してドイツ語を教えており、ボランティアのドイツ語教員に学期がはじまるときに行われる教授法のオリエンテーションは市民大学の教員が行っている。このように、市民大学とボランティア団体が共に活動することでドイツ語学習者やボランティアである学習支援者の可能性を広げている。

交流プロジェクトに参加する難民は、「普段ドイツ人と関わりがないのでこのような場があるのは嬉しい」と話す。仕事をはじめの前や難民ハイムと呼ばれる難民が多く住むマンションのようなところに住んでいる間は特にドイツ人との接触が少ないという。難民カフェではドイツ人・難民に関係なく、参加者の中で同じ趣味の人が集まって、週末にジョギングやサイクリングをすることも少なくない。このように、交流の場を通じて活動を共にすることで社会参画が行われている。女性カフェでは、シリア人女性が感じた子育てにおけるギャップと暮らしにくさを話題に出すと、子育てを終えたドイツ人女性はドイツ人の考え方や暮らし方を伝えながら文化の違いによる違和感の払拭に努める。このように全く異なる文化を持つ人々が共存する社会では、互いに会話を重ねて相互の文化や習慣を尊重して暮らしていくことが求められる。

パッサウ市の難民に対するボランティアの学習支援の役割や交流プロジェクトの実態の調査から、統合コースを実施する市民大学とボランティア団体がそれぞれ課題を抱えながらも互いに不足している部分を補完的に活動していることが明らかになった。特に地域でボランティアや民間組織、市などの公的機関が包括的なネットワークを築くことで、より難民のニーズに沿った活動が行えている。しかし、タンデムプロジェクトではペアの相性によってはうまくいかないこともある。また、タンデムの参加希望者はドイツ人より難民のほうが多いため、どのように多くの学生の興味を引き付けられるかに主任者は頭を抱えていた。学生の参加者が多い交流イベントでは、帰省のため休暇中の参加者が少ない。ボランティアの利点として、活動を柔軟にニーズに沿って行えることがあげられるが、ボランティアの不足も現状である。庇護申請者数も落ち着きを見せはじめた今、ボランティア間のどのような連携が効果的なのか、どのようにドイツ人ボランティアの参加を促すか、今一度考える必要があるだろう。

参考文献

- 足立祐子 (2009). ドイツの現在と新潟 春原憲一郎(編) 移動労働者とその家族のための言語政策 ひつじ書房, 93-120.
- 木戸芳子 (2017). 移民のためのドイツ語教育: 統合コースとドイツ語試験研究紀要 東京音楽大学, 40, 29-53.
- 金箱秀俊 (2010). 移民統合における言語教育の役割—ドイツの事例を中心に— レファレンス, 60, 51-76.
- 久保山亮 (2009). ドイツの移民政策における自治体と中間的組織—1990年代後半からの政策転換と“統合から締め出される「事実上の定住者」”— 庄司博史(編) 移民とともに変わる地域と国家 国立民族学博物館, 257-278.
- 熊谷知美 (2016). 難民を受け入れるドイツ—レーゲンスブルク市の場合— 人間文化研究, 37, 119-143.
- 公益財団法人日本国際交流センター (2017). ドイツの移民・難民政策の新たな挑戦—2016 ドイツ現地調査報告—
- 昔農英明 (2016). ドイツにおける市民的統合と移民組織: ムスリム移民の活動の変容 三田社会学, 21, 3-17.
- 平高史也 (2011). ドイツにおける移民のための統合コース 民博通信 国立民族学博物館, 135, 12-13.
- 平高史也・荒木萌 (2018). ドイツ語統合コースの現状—大量難民受入れ以降の状況を中心に— 社会言語科学会, 41, 162-165.
- 山川智子 (2012). ドイツ語学習支援の現場から 松原好次・山本忠行(編) 言語と貧困—負の連鎖の中で生きる世界の言語的マイノリティ 明石書店, 241-243.
- Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend (2017). *Engagement in der Flüchtlingshilfe — Ergebnisbericht einer Untersuchung des Instituts für Demoskopie Allensbach —*.
<<https://www.bmfsfj.de/blob/122010/d35ec9bf4a940ea49283485db4625aaf/engagement-in-der-fluechtlingshilfe-data.pdf>>